

2022 年 2 月 23 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科

修士論文

新型コロナウイルス感染拡大による臨地小児看護学実習の縮小が
学生の認識する小児看護実践能力に及ぼす影響

The Reduction in Clinical Pediatric Nursing Practice
Due to The Spread of Covid-19 Influence on
Students' Perceived Pediatric Nurses Core Competencies

19MN303

監物 佳子

【目的】 新型コロナウイルス感染拡大下における小児看護学実習を履修した学生の小児看護実践能力の認識を、学年別および実習形式別に明らかにすること、小児看護実践能力の認識の育ちに影響する要因を見出すことを目的とした。

【方法】 全国の看護学生および小児看護に従事する新人看護師を対象に、WEB を用いて無記名自己記入式質問紙調査を実施した。本研究の概念枠組み（図 1）に基づき、研究者が自作したビネット、日本語版精神的エンパワメント尺度、一般性セルフ・エフィカシー尺度で質問紙を構成した。ビネットの信頼性・妥当性を検討後、ビネット得点と学年別および実習形式別での一元配置の分散分析・多重比較、ビネット得点を目的変数、「臨地日数」「学修形態」「学修方法」「子どもとの交流」「看護師との交流」「エンパワメント」「自己効力感」「属性」を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）にて分析を行った。データの分析には統計パッケージ IBM SPSS statistics 28.0 を使用した。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号 20-A092）。

【結果】 調査協力を得た 63 基礎教育機関（7.6%）および 63 病院（11.2%）から得られた回答の有効回答率は、学生 87.4%（297 名）、新人看護師 100%（44 名）であった。小児看護学実習を履修した学生 151 名のうち、臨地での実習ありは 83 名（55.0%）、代替学修ありは 133 名（88.1%）であった。一元配置の分散分析・多重比較の結果、小児看護実践能力の認識が最も高かったのは実習形式別 5 群間では臨床経験群（＝新人）、学生間ではハイブリット実習群（＝臨地＋代替）であった。実習形式別 3 群（以下、3 群）において重回帰分析を行った結果、代替学修群では「保育園等での子どもとの交流」、「学内での看護師との直接的交流」「エンパワメント」が有意な正の影響を示し、代替学修&臨地実習群では「臨地日数」「エンパワメント」が有意な正の影響を、「自己効力感の低下」が有意な負の影響を示し、臨地実習群では「エンパワメント」が有意な正の影響を、「臨地での子どもの見学」が有意な負の影響を示した。

【結論】 学生の小児看護実践能力の認識は、小児看護学実習の履修によって上昇し、3 群のうち臨地実習&代替実習群が最も高かった。臨地での実習に制限がある中でも学生の認識する小児看護実践能力を高めていくためには、短い実習配置による帰属意識の低下に対する教育的支援、保育園等での子どもとの交流や実習の場への看護師招聘の効果的活用、学生自身による小児看護実践の積極的導入、そして学生がエンパワメントされる学習環境の構築が必要である。